

国際エグゼクティブフォーラム朝食会講演

2008年4月25日(金)

ドラッカー学会代表

ものづくり大学名誉教授

立命館大学客員教授 上田惇生

『これなくして経営はないードラッカー経営思想の真髄』

序. ー現代社会最高の哲人 ーマネジメントの父 ーそれぞれのドラッカー  
ーウェルチへの質問 オニールへの授業 エドワード・ジョーンズからの手紙

1. 産業社会は社会として成立するか

ー文明の崩壊、社会的存在としての人間、「社会についての一般理論」、ブルジョア資本主義、マルクス社会主義、経済至上主義、『「経済人」の終わり』、脱経済至上主義、ファシズム全体主義、第2次世界大戦、産業社会、生産性革命、「産業社会についての特別理論」、『産業人の未来』

ー産業現場、『企業とは何か』、ユーザーとワーカー、マネジメント、『現代の経営』『創造する経営者』『経営者の条件』、三つの役割、七つの目標、第8の目標、プロの倫理、コンプライアンス、文化の問題、コーポレートガバナンス、万人の帝王学、転換

2. われわれは今いかなる時代にあるか

ー群発地震、『断絶の時代』、歴史の峠、大転換期、ポスト資本主義社会、稀なる世代、車窓の変化、経済- IT革命、経営- 起業家精神、社会- 少子高齢化、政治- 脱階層、行政- 脱政府、教育- 知識変化、社会- 知識化・少子高齢化、人生- 革命、いよいよのクライマックス、静かな革命(情報、距離、境界、顧客、人口)、歴史- 慣習の形成

3. 部分最適の和では全体最適は得られない

ーモダンからポストモダンへ、社会生態学、経済学、未来学、「見るために生まれ」、原因と結果、部分と全体、演繹と帰納、バタフライ効果、アセスメントとモニタリング、21世紀の問題(教育、環境、途上国、グローバル化、高齢化社会)

ー真理は掴めるか、理性主義、絶対主義、保守反動、正統保守主義、例えば万病の薬、基本と原則、企業経営、組織構造、アート・アンド・サイエンス

ー万人の帝王学、真摯さ、所(強み・方法・価値)、成果原則(貢献・集中・基準)、方法論(時間管理・意思決定・マーケティング・イノベーション・生産性・ベンチャー・人事)、仕事と自己実現、ネットワーキング、第二の人生

結. ドラッカーの真髓—何をもって憶えられたいか

「ポストモダンの七つの作法」

1. 見る、そして聞く（命あるもの）
2. 分かったものを使う（既に起こった未来、予期せぬもの）
3. 基本と原則を補助線として使う（経営の目的、組織構造）
4. 欠けたものを探す（未知なるものの体系化）
5. 自らを陳腐化させる（エントロピーの法則）
6. 仕掛けを作る（成功会議、ベストプラクティス、ネットワーク）
7. モダンの手法を使う（時間管理）

「一流たるための七つの心得」

1. 所を得る
  - 得意なことを知る①
  - 得意な方法を知る②
  - 得意な環境を知る③
  - 自らの価値観を知る④
2. 方法を知る
  - 成果原則を知る（貢献、集中、水準）⑤
  - マネジメントの各論を知る⑥
3. 真摯である⑦

「新事業三つの心得」

1. 小さく創める
2. シンプルに創める
3. トップを目指す

「新事業スタート後の三つの心得」

1. 予期せぬ客が本当の客
2. キャッシュが大事
3. チームの編成

「経営者の七つの心得」

1. 姿勢
  - 為されるべきことを考える①
  - 会社のためを考える②
2. 計画

—アクションプランをもつ③

### 3. 行動

—意思決定をフォローする④

—情報を与え求める⑤

—機会を中心におく⑥

—会議の生産性をあげる⑦

ドラッカー関係—最近の動きと今後の予定

- ・ドラッカー逝去（2005年11月11日）
- ・ドラッカー学会（<http://drucker-ws.org>）設立（11月19日）
- ・『入門ドラッカー—万人のための帝王学』上田惇生著（06年9月）
- ・「ドラッカー・エターナル・コレクション」12作品14巻刊行（06-08）
- ・『P. F.ドラッカー—理想企業を求めて』エリザベス・イーダスハイム著（07年5月）
- ・『プロフェッショナルの原点』（08年2月）
- ・『傍観者の時代』（08年5月）

ドラッカーの名言

「成果をあげる人とあげない人の差は才能ではない。いくつかの習慣的な姿勢と、基礎的な方法を身につけているかどうかの問題である。しかし、組織というものが最近の発明であるために、人はまだこれらのことに優れるに至っていない。」

「われわれはいつの間にか、モダン（近代合理主義）と呼ばれる時代から、名もない新しい時代へと移行した。昨日までモダンと呼ばれ、最新のものとされてきた世界観、問題意識、抛り所が、いずれも意味をなさなくなった。」

「自らの成長のために最も優先すべきは、卓越性の追求である。そこから充実と自信が生まれる。能力は仕事の質を変えるだけでなく、人間そのものを変えるがゆえに、重大な意味をもつ。」

「組織に働く者は、組織の使命が社会において重要であり、他のあらゆるものの基盤であるとの信念をもたなければならない。この信念がなければ、いかなる組織といえども、自信と誇りを失い、成果をあげる能力を失う。」

「組織は知識労働者に対し、その知識を生かすための最高の機会を提供することによって

のみ、忠誠心を獲得できる。」

以上